

▲巨大な構造材の組み立てを行う陸上自衛隊東北方面隊第2施設団。

写真提供 陸上自衛隊東北方面隊

沿岸部の幹線道路 国道 45 号は、水尻川を渡って石巻方面から南三陸町の中心部 志津川地区に入る。東日本大震災の津波は、南三陸町沿岸部の橋という橋を破壊した。水尻川の河口近くにあった水尻橋も、津波で右岸の陸地が大きくえぐり取られて崩落。志津川地区と戸倉地区や石巻方面を結ぶ大動脈が不通となった。

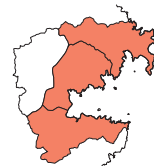
このため、志津川地区に緊急車両が入るためには、登米市東和町方面からアクセスするしかなくなった。

自衛隊は震災の1週間後、仮設橋を完成させたが、夜は緊急車両しか通れなかった。その後、2011（平成 23）年 4 月下旬に一車線交互通行できるようになり、同年 5 月 18 日二車線の仮設橋建設が行われた。

この橋がかかったことで、戸倉地区と志津川地区の往来もできるようになり、石巻方面からのアクセスも可能となった。

これにより、南三陸の物流の生命線がついに復活し、復旧作業に大きなはずみがついた。

だれかいないか？ 膨大な瓦礫をかき分けて



▲降りしきる雪の中で行方不明者の捜索が続く。(2011(平成23)年3月16日)

写真提供 陸上自衛隊西部方面隊

人命救助は「発災後 72 時間が勝負」とされる。津波で跡形もなく建物が破壊された町のどこかで生存者が救出を待っているかもしれない。「生きてる人はいませんか！」

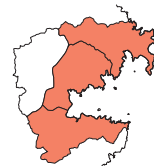
自衛官、消防士、警察官、そしてスイス、オーストラリア、ニュージーランドをはじめとする海外からの緊急援助隊などが、瓦礫の中で懸命の捜索を開始した。

目の前に広がる重量鉄骨や壊れた家屋の瓦礫の山が捜索する自衛隊の行く手をはばんだ。発見されるのは、突然日常を奪われた人たちの亡骸ばかりだった。ひとりでも多くの生存者をと意気込んでいた彼らに深い悲しみが広がった。その悲しみを胸に押し込めながら、ひとりも見逃すまいと、折り重なる瓦礫をよけ泥をかき分けて、来る日も来る日も捜索は続けられた。

避難所では、行方の知れない家族の無事を信じて、祈るように帰りを待ちわびる多くの住民たちの姿があった。

家族のもとに一刻も早く帰してやりたい。過酷な状況の中、だれもがその一心で捜索を続けた。

道を開け！ 命をつなぐために



▲志津川地区での道路の瓦礫を取り除く陸上自衛隊北部方面隊（2011（平成23）年5月12日）

何もかも流された住民たちの命を救うための食料や救援物資の輸送もインフラの再生も、すべては車両が通れる道が開かれなければ始まらなかった。鉄骨を切断し、側溝の土を掻き出し、橋を掛け、道路を確保するための厳しい作業が数ヶ月にわたり続けられた。

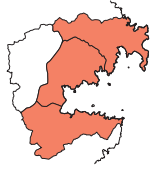


▲戸倉地区の国道45号を補修（2011（平成23）年3月22日）



▲志津川地区での道路復旧（2011（平成23）年5月1日）

写真提供 陸上自衛隊北部方面隊



▲住民たちの思い出の品、持ち主がわかる物は道路端に分別する陸上自衛隊西部方面隊第4師団。(2011(平成23)年3月18日)

写真提供 陸上自衛隊西部方面隊

津波が去った町はまさに異世界だった。瓦礫や漂流物が散乱し、道路沿いに続く杉林の高い枝には、人々のこれまでの生活感を強烈に発する衣服や布切れ、ビニールなどの無数の漂流物が引っかかり風に揺れていた。夕暮れ時薄暗くなると、怪しく揺れるその漂流物は、住民の日常が無残にも奪われた現実を否応なしに突きつけた。

これらの漂流物を撤去してほしいという住民からの訴えを受け、町長は自衛隊に相談した。高所の漂流物撤去は本来の自衛隊災害派遣業務の項目にはない作業だったが、自衛隊はこの要請を快諾して

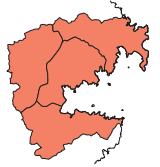
くれた。「災害漂流物撤去作戦」と命名し、高所の漂流物をひとつひとつ手作業で取り除き始めた。写真や位牌などが発見されると、丁寧に道端に置いてくれた。

被災した住民たちの心に寄り添い、泥まみれで頑張ってくれた彼らの姿に私たちは今もなお敬意と感謝の思いを抱き続けている。



▲瓦礫の中に時折見つかると泥まみれの写真
(2011(平成23)年3月13日)

写真提供 南三陸町社会福祉協議会



▲町内の複数避難所にソーラーパネルを搬入

写真提供 陸上自衛隊東北方面隊

沿岸部の道が途絶えたことで多くの集落が陸の孤島になった南三陸町では、水や食料、衣類、燃料、生活用品のすべてが不足した。約1万人の避難者に救援物資が行き渡るまでには、半月以上の時間がかかった。

自衛隊は、遺体捜索、道路復旧などの作業のかたわら、水やソーラーパネルなど、人々の命をつなぐために必要なものを運び続けた。当初、緊急車両が通れる道は限られ、内陸から沿岸部に至る主要道路は大渋滞していた。仙台の駐屯地から南三陸町までは、片道5時間もの時間を要する日もあった。



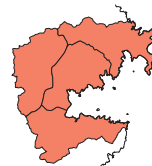
▲歌津中学校に降りたアメリカ軍の物資輸送ヘリから避難していた住民たちが物資を下ろし、リレーで搬入する。

写真提供 南三陸町社会福祉協議会

震災から3日目、まだ道路の通行がままならない時期にアメリカ軍からヘリコプターによるたくさんの支援物資が届けられた。避難者は「cold（寒い）」と身振り手振りで状況を伝え、翌日には水や毛布、そして温められた食料を届けてくれた。「トモダチ作戦」と銘打たれたその支援に、世界中から支えられている実感とアメリカの方々への感謝の気持ちでいっぱいになった。

避難所に届けられた数々の支援物資は、被災した住民たちの生活を大きく支えた。

ひとときの安らぎをくれた生活支援



▲志津川地区沼田に仮設された大浴場。陸上自衛隊西部方面隊第8師団が提供してくれた。
大きなお風呂で身も心も温まる。

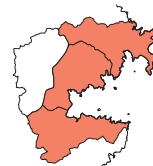
熊本から救援に駆けつけた自衛隊が仮設したお風呂は通称「火の国の湯」と呼ばれ、その中は温かな湯気で満たされていた。全身を洗い、このお風呂で温まると、疲れが癒された。瓦礫だらけの町の厳しい現実をひととき忘れて、みんなが笑顔になった。



▲陸上自衛隊西部方面隊第4師団による炊き出し
(2011(平成23)年4月26日)

写真提供 陸上自衛隊東北方面隊

自衛隊が炊き出ししてくれるあたたかい食事は、当初冷たいものしか口にできなかった住民たちに生きる力を与えてくれた。なるべく多くの人々に、栄養のあるあたたかい食事を取ってもらいたいと工夫された炊き出しは、私たちにとって忘れられない味になった。



▲隊員たちを見送る住民たちは、沿道で手を振り続けた。

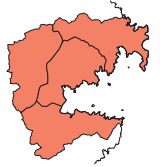
南三陸町に駐留し、行方不明者の捜索や復旧支援に当たっていた自衛隊のほとんどは6月末で撤収となった。津波でほとんどの機能が失われた南三陸町にとって、震災直後から住民たちを支え続けてきた自衛隊は、きわめて大きな存在だった。

しかし、陸上自衛隊第22普通科連隊(宮城県多賀城市)の活動は、2011(平成23)年8月にまで及んだ。連隊は行方不明者の捜索のほか、食事の提供、給水、入浴、ハエの駆除など多様な活動で住民を支え続けてくれた。

同年8月5日、バイサイドアリーナの多目的広場で、陸上自衛隊第22普通科連隊の撤収式が行われた。この日の式典には隊員34人が出席した。國友昭連隊長(当時)の「町が力強く復興することを祈っています」というあいさつに、私たちの胸は熱くなった。佐藤仁町長は「自衛隊は町民にとって大変心強い存在でした」と心からの感謝を述べた。別れを惜しみに駆けつけた住民たちは、いつまでも手を振り続けた。

心強かった自衛隊の存在が消え、私たちの心には一抹の寂しさが宿った。

悲しみに寄り添いながら



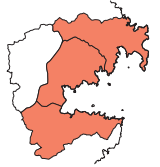
▲2011（平成23）年5月11日「南三陸の海に思いを届けよう」という集会在志津川中学校で行われた。支援活動を行っていたNPOの呼びかけで、中学生や住民たちと共に自衛隊員たちも静かに海に向き合った。

撮影 福田沙織

震災直後の南三陸町でいち早く行方不明者捜索と道路復旧などに当たった自衛隊は、作業を開始する際には必ず犠牲者に黙祷を捧げた。

多くの住民は、かけがえのない人たちと家や職場をこの震災で失った。しかし、その現実に向き合うのには長い時間を要した。2011（平成23）年5月11日、NPOの呼びかけで「南三陸の海に思いを届けよう」という集会が開かれた。その頃は、「追悼」という言葉を使うことさえ、はばかれていた。音楽家の奏でる曲を聞きながら、それぞれが黙して海に向き合う時間が作られた。それまで気丈に避難所運営や炊き出しなどに従事してきた住民たちも初めて静かに涙を流した。

志津川中学校の校庭に駐留していた西部方面隊の隊員たちも静かにその列に加わってくれた。住民たちの悲しみに心を寄せ悼む場を共にしてくれる自衛隊員たちの優しさと誠意に、筆舌に尽くしがたいほど大きな力を私たちはもらった。



▲毎月末の日曜に開かれるようになった南三陸復興市で和太鼓演奏を披露する北部方面隊の隊員たち。撤収が近づき、力強い演奏を聞かせてくれた。

南三陸町に派遣された自衛隊員たちは、2011（平成23）年8月まで幅広い活動を展開していた。その間、避難所や給水、炊き出し、入浴、イベントなどの際に多様な交流が行われた。沖縄からの隊員は、子どもたちに三線を教えたり、活動の合間に子どもたちと遊んでくれた。また、たくさんの写真や思い出の品を瓦礫の中から丁寧に見つけ出してくれた。

過酷な環境の中、骨身を削って活動している隊員たちの姿に、私たちは口々に感謝の言葉を伝えた。

隊員たちをもてなしたい気持ちはあったが、それができないことに住民の誰もがもどかしさを感じていた。

その誠心誠意の活動は、「自分たちもあきらめずに、がんばらなければ」という強いモチベーションを私たちに与えてくれた。

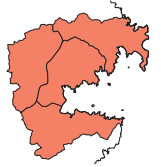
自衛隊は私たちのヒーローだった。



▲自衛隊への感謝を表す横断幕が町のあちこちに掲示されていた。

写真提供 陸上自衛隊北部方面隊

仮設住宅用地造成



▲南三陸町は平地が少ないため、仮設住宅建設のためには新たな用地造成作業が必要だった。
陸上自衛隊北部方面隊が用地造成作業に当たった。

一刻も早い仮設住宅入居をと、多くの住民たちが待っていた。しかし、南三陸町はリアス式海岸の地形から、住宅建設に適した平らな土地が少なく、用地造成が課題となっていた。学校の校庭以外の平地は畑しかなく、畑に住宅を建てるには整地が必要だった。しかし、地元の建設業は瓦礫撤去に追われ、従事できる人も重機もなかった。町長は仮設住宅用地造成工事が自衛隊の災害派遣業務ではないとは知りながらも何とかお願いできないかと嘆願した。北部方面隊の施設大隊長は町の窮地を前に上級部隊に掛け合ってくれ、用地造成工事を引き受けてくれた。

大隊長は町長に「その代わりひとつだけお願いがある」と言った。それは1団地の用地造成が終わる度に、町長が現場に赴いて隊員たちに「ありがとう」と言葉をかけてほしいということだった。



▲施設隊長たちが仮設住宅用地を確認し、
整地計画について話し合う。

自衛隊の施設中隊が各所に分かれ、狭い用地を切り拓いては整地する地道な作業が、休むことなく続いた。条件が必ずしも良いとは限らない中、自衛隊は確かな技術で、迅速に仮設住宅建設の基礎を整えてくれた。

町長がすべての現場に通い、「みなさんの努力に感謝したい。ありがとう。」と伝え続けたことは言うまでもない。自衛隊の支援なしに仮設住宅の建設遂行はありえなかった。

写真提供 陸上自衛隊北部方面隊